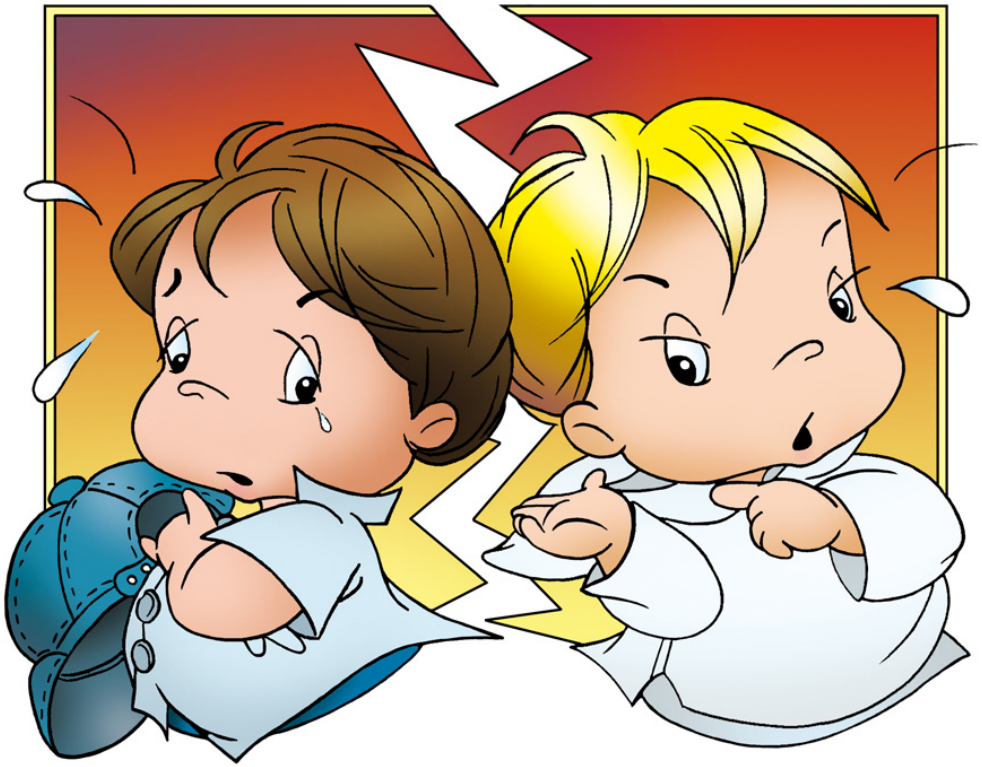
ジェイクおじいちゃんの お話シリーズ

ゆかいな虫たち：苦々しさがうれしさに

「それ、ぼくの！　それで 遊んじゃ だめ！」　いとこの トロイから おもちゃの 消防車を ひったくりながら、トリスタンが 大声を あげました。「これ、特別な 消防車なんだ。ぼくが 遊ぶの！」

「だけど、ぼくが 最初に 遊んでたんだよ。どうして 取っちゃうの？」　トロイの 目に、なみだが あふれて きました。

「これ、ぼくの お気に入りなんだ！　だから、トロイには 貸さないよ。」と、トリスタン。



「それは また、いじわるな 話し方じゃ ないか、トリスタン。」
2人が 大声で 言い合いを しているのを 聞きつけて やって来た
ジェイクおじいちゃんが 言いました。

「トロイが ぼくの お気に入りの おもちゃを 全部 取っちゃうんだ。」
と、トリスタン。

「だけど、遊んで なかったじゃ ないか。ただ、ぼくに 遊んで
ほしく ないだけでしょ。」　トロイが 泣きながら 言いました。

「そうなのかい、トリスタン？　どうして トロイに 遊んで
ほしく ないんだい？」と、ジェイクおじいちゃんが たずねました。

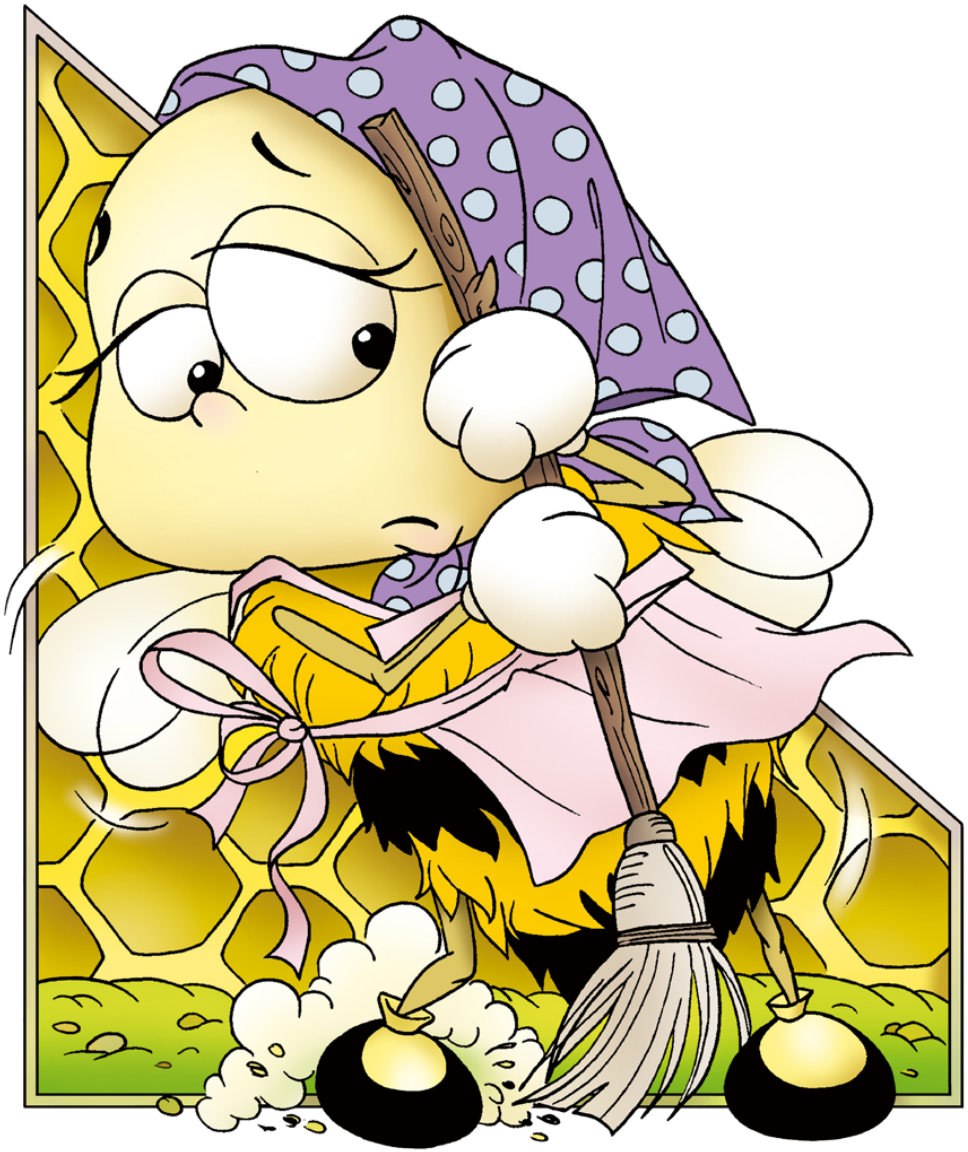
「だって・・・。」　トリスタンは、少し 考えて 言いました。
「ぼくも 遊びたく なるかも しれないでしょ。だけど、
トロイが 遊んでたら、遊べないもの。」

「それで、ある お話を 思い出したよ。」
何か 考えこんだ 様子で、ジェイクおじいちゃんが
言いました。

「何の お話？」と、トロイ。

「たしか、ビッツも だれかに 何かを
あげるのが いやだったと
思うが。本を
取って 来よう。
この 問題を
解決する ヒントが
見つかるかも
しれないぞ。」

今日は、ビッツに とって いやな 日でした。それで、巣箱の周りで いそがしく しながら、1日中 ふくれっつらを していました。午前中は ずっと、悲しくて 腹を 立てて いました。花の みつを集めに 行こうと 巣箱から 飛び出すと、だれかが よび止める 声がします。



「ビッツ！　待って！」　近所の 巣箱から 来た、友だちの ペッパーでした。

ビッツは いっしゅん、スピードを 落としました。今は、ペッパーと いっしょに いる 気が しないので、ふきげんでした。

息を 切らせながら ビッツに 追いつくと、ペッパーは にっこり ほほ笑んで 言いました。「ふう、今日は ずいぶん 速く 飛び回って いるのう、ビッツ。わしみたいな 年寄りは、きたえられるわい。」そう 言って、ペッパーは クスクスと 笑いました。

ビッツは ちょっと 笑って
言いました。「わたし、
急がなくちゃ いけないの。
もっと たくさんの みつを
集めないと いけないのよ。」

ビッツは 先を 急ぎたくて、
だれとも 話す 気分では
ないのです。

「わしも いっしょに
行って いいかの？」と、
ペッパーが たずねました。

「来たいのならね。」
そう 言って、ビッツは
先を 急ぎました。

2ひきは となりの 花畑に 飛んで 行きました。
そこには、ビッツが 集められる
花の みつが たくさん あるのです。

ペッパーは たえず 話しかけて きますが、ビッツは あまり
話しません。「今日は、いい お天気だね！」 ペッパーが
大声で 言いました。ビッツは かたを すくめるだけです。

「わしは、夏が 大好きなんだ！」 ペッパーは
話し続けました。今度も、ビッツは だんまりです。

ついに、せわしなく みつを 集めている ビッツに
向き直って、ペッパーが 言いました。「ビッツ、
何か 気に さわる ことでも あるのかい？」

「別に。」と、ビッツが 答えました。

「だけど、今日は ほとんど 話して くれないじゃ ないか。おこって いるようだが。わしに 腹を 立てて いるのかい？」と、ペッパー。

ついに、ビッツが 立ち止まりました。「ちがうわ。そんなんじゃないの。」　ビッツは はっと して、今まで ペッパーを 無視して いた ことを すまなく 思いました。「ごめんなさい、ペッパー。あなたは 何も 悪く ないわ。あなたに おこってる わけじゃ ないの。ただ、今日は ちょっと ゆううつな だけよ。」

「そうかい。そりゃあ、楽しく ないだろうね。」　ペッパーは 同情しながら 言いました。「何か あったのかい？」

「そうね。何日か 前、わたしたちが おいしい はちみつを 作り終えた ばかりの 時の ことなんだけど。農場主が 来て、作り立ての はちみつを 半分以上、持って 行っちゃった の。わたしたちが 何日も 何日も かけて、出かけて 行っては みつを 集めて 作った はちみつをよ。ただ 来て、持って 行っちゃった の！　それも、初めての ことじゃ ないのよ。彼は たびたび やって来ては、わたしたちの はちみつを 持って行って しまうの。」

「以前は、そんなに 気に ならなかったのよ。全部 持って行って しまう わけじゃ ないし、わたしたちの 分は いつも 十分に あるもの。だけど、そのために こんなに 一生けん命 働かなくちゃ いけないなんて、時には 腹が 立つのよ。」

「ふ～む、確かに それは いらいらするかもなあ。わしも、以前は 自分の 巣箱の ことで、そう 感じていた 時が あったよ。」 ペッパーは おだやかに 言いました。

「本当？　今でも 気に なる？」　ビッツは おどろいて たずねました。

「いいや。とても きょうみ深い ことを 知ってからはな。ビッツ、どうして 農場主が はちみつを 持って行って しまうのか、知っているかい？」と、ペッパーが たずねました。

「知らないわ！」　頭を 横に ふりながら、ビッツが 答えました。

「つまりだな、農場主も、わしらみたいに はちみつを 使うって ことだ。はちみつが 非常に おいしいので、パンや パンケーキに かけたり、お菓子を 作るのに 使っているんじゃ。」

「そうなの？」と、ビッツ。

「そういう ことじゃ。はちみつが すごく おいしいと 思っている。子どもたちもな。」　そう 言って、ペッパーは にっこり しました。

ビッツは ちょっと 考えて みました。「まあ、農場主が はちみつを 持って行くのも、そう 悪くは ないのかも しれないわね。大好きだからだって いうのは、ぜんぜん 知らなかったわ。」

「わしらが 好きな もの、一生けん命に 作った ものでも、他の 者たちに あげるなら、神様は 喜んで くださる。どれだけ あげても、必ず また もらえるからの。神様は、わしらが 他の 者たちと 分け合う ことを 喜んで くださる。だから、ご自身が 造られた この すばらしい 世界を、わしらと 分かち合って くださるんじゃ。」と、ペッパーが 説明しました。

「教えてくれて ありがとう、ペッパー。」　そう 言って、ビッツは ペッパーに ハグを しました。「今朝は むっつりしてて、ごめんなさい。教えてくれて、助かったわ。農場主が はちみつを 持って行って しまう ことで、もう 苦々しく 思わないもの。今は もう、ずっと 気分が いいわ。」

「元気を 取りもどして くれて、良かったよ！」 そう 言って、ペッパーも ビッツに ハグを しました。

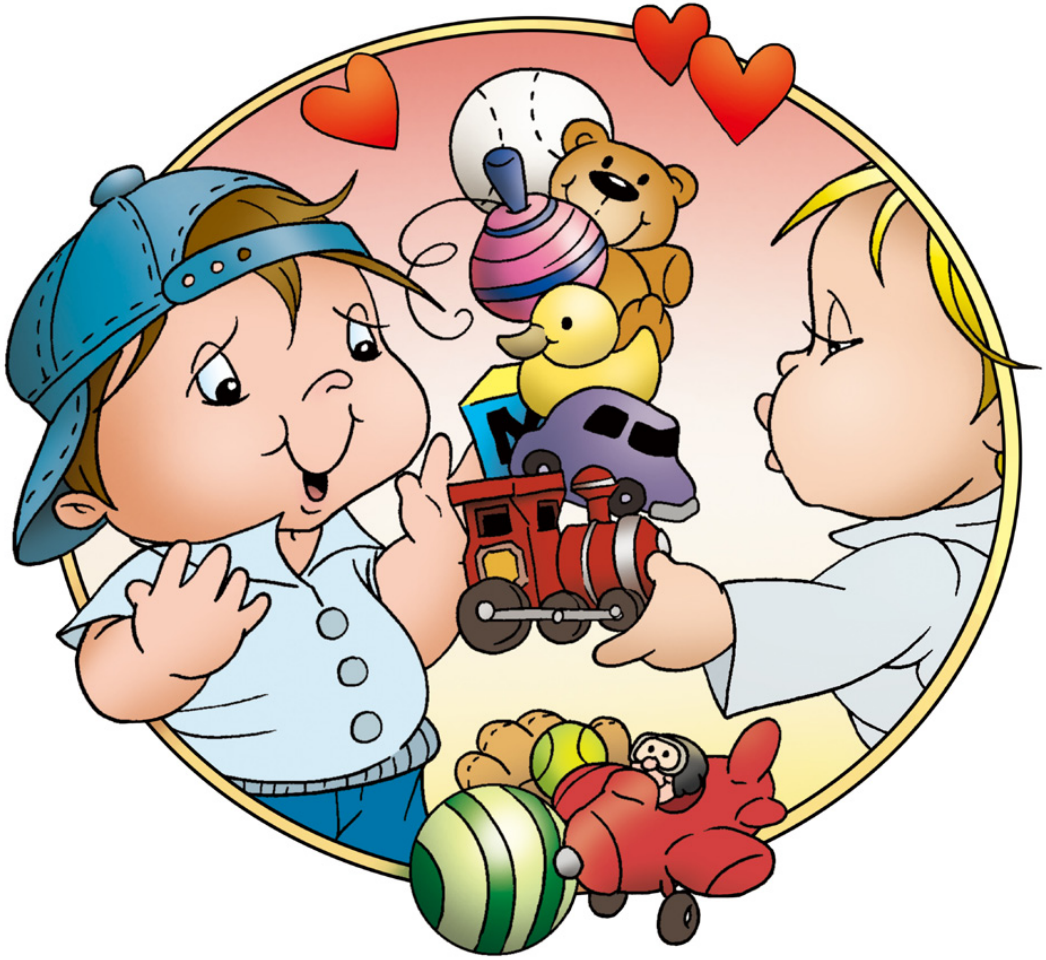
その日の 午後、ビッツは また みつを 集めに 行きました。すると、農場主の 娘さんが 庭で 遊んで いました。ビッツの 羽音を 聞くと、女の子は ほほ笑んで 言いました。「神様、ハチを 感謝します！ はちみつって、ものすごく おいしいです。ハチに はちみつの 作り方を 教えてくださって、感謝します。ミツバチたちが はちみつを 分けてくれる ことも、感謝します。」

それを 聞いて、ビッツは にっこり ほほ笑みました。女の子が はちみつを とても 喜んでいる ことを 聞いて、うれしく なりました。「どう いたしまして。」そう ささやいて、ビッツは 巣箱に もどって 行きました。

「ぼくも、トロイに おもちゃを 貸してあげるよ！　ビッツが 一生けん命 集めて できた はちみつを、喜んで 農場主の 家族に 分けてあげた みたいにね。」と、トリスタンが 言いました。

「ありがとう。ぼくも、大切に 遊ぶよ。」と、トロイも 言いました。

子どもたちが 仲良く 遊び始めるのを 見ると、ジェイクおじいちゃんは にっこり ほほ笑んで 部屋を 出て行きました。



文：カチューシャ・ジュスティ　絵：アグネス・リメア　彩色：ダグ・カルダー　デザイン：ロイ・エバンス　掲載：マイ・ワンダー・スタジオ　Copyright © 2007年、オーロラ・プロダクションズAG、スイス、不許複製
“Grandpa Jake’s Storybook: Insects Galore: Bitter, Better Bee”--Japanese